

---

## 私の夢

福島県農業総合センター農業短期大学校 畜産経営学科 1年 菅野 泰夢

---

私は、将来、酪農で地域を復興したいと考えています。

以前、私の家では、酪農を経営していました。しかし、ある日を境にやめてしまいました。ある日とは、2011年3月11日、東日本大震災が発生した日です。大地震の影響で発生した津波が福島第一原発事故を引き起こし、漏れ出した放射性物質が私の住む川俣町山木屋地区にも大きな影響を与えました。町内で生産された牛乳から基準値を超える放射性物質が検出されたため、町内全域の牛乳の出荷自粛が求められました。我が家も突然、牛乳の出荷を停止することになりました。

しかし、牛は毎日体内で乳を作ります。出荷が停止になったからといって、搾乳をやめるわけにはいきませんでした。出荷停止となった後は、搾った牛乳は全量捨てることになりました。せっかく搾った牛乳を捨てる日々が続く中、山木屋地区が計画的避難区域に指定され、地区の全住民が避難を余儀なくされ、酪農の経営を続けることができなくなりました。牛は手放さざるを得なくなり、知り合いの酪農家さんなどに売られていきました。その何年か後には、牛のいない牛舎は解体され更地へとなりました。震災当時、私は小学2年生でしたが、震災前は、牛の世話の手伝いをしていました。子牛にミルクをあげたり、糞を牛舎から出したり、ロール、サイレージをあげたり、牛床にわらを敷いたりしていました。分娩のときは、ロープで引っ張る等の助産もやりました。牧草の収穫やデントコーンの種まきの時期にはトラクターの作業を眺めたり、ダンプの助手席に乗せてもらったりするのが楽しみでした。将来は家の仕事をやりたいと思うようになっていきました。中学校3年生の時卒業後の進路は、最初は、牛の事を学べる農業高校へ行きたいと考えていました。しかし、担当の先生から工業高校への進学も勧められ、工業高校の体験入学に参加しました。そこでいろいろな機械装置や入学後に取得できる資格などについて説明を聞いているうちに、酪農を学ぶ前に工業系の高校に進学するのも良いと思うようになりました、また、以前から物づくりも好きだったので、二本松工業高等学校へ入学しようと決めました。高校では、溶接や電気関係、施盤加工といったいろいろな加工の方法について学びました。これら工業に関する知識や技術は酪農に生かせるのではないかと思いました。例えば、酪農は牛の飼養管理や飼料作物の収穫・調製の作業で、様々な機械を使いますが、機械は故障がつきものです。そんなときに工業高校で学んだことを生かせるのではないかと思いました。高校卒業後は、1年の時から農業系の大学か短大に行きたいと思っていました。どこがいいかと考えていたとき、親から実践的なことを学びたいなら福島県農業総合センター農業短期大学校がいいと勧められ、そこにしようと決めました。短期大学校は2年間で卒業できるので普通の

---

大学に行くよりも早く実践経験を積んで、酪農の仕事ができると考えました。高校3年の夏休みには農業短期大学校のオープンキャンパスに参加し、畜産経営学科で牛体測定やブラッシングを体験しました。牛に触れるのは小学2年生以来でした。ほんの短い時間でしたが、穏やかな牛の表情やぬくもりを肌で感じ、小学生の頃の「酪農の仕事に就きたい」という気持ちを再確認できました。高校の先生の協力もあり、福島県農業総合センター農業短期大学校に合格し、今春から畜産経営学科に在籍しています。短期大学校では、乳用牛と肉用牛を飼養しており、1学年生のうちは、乳牛と肉用牛の両方の飼養管理を交代で行っています。畜産経営学科は朝も早く、休日の当番もあります。また、どんなに暑くても寒くとも、毎日必ず作業があり、とても大変ですが、楽しいこともあります。入学して一番楽しかったのは、子牛が生まれるところに立ち会えたことです。幼い時にも分娩の手伝いをしたことがあります、新しい命が生まれる瞬間は何度見ても感動します。実習はだんだんと慣れてきて楽しいですが、講義は専門的で苦労しています。高校では学んでこなかった科目や専門用語が多く、覚えることが盛りだくさんです。しかし、将来の酪農をやるという夢を叶えるために実習も講義も全力で取り組んでいくつもりです。

私が酪農の仕事に就きたいもう1つの理由は、酪農で地域を復興させたいからです。原発事故直後、私が住んでいた地区は放射能の影響で屋外での活動が何もできなくなってしまいました。地区の住民は全員避難しました。原発事故から数年後、除染が行われ、田んぼや畑の表土の数センチが削り取られました。山林もどんどん除染作業が進められていました。その結果、現在では水稻の作付けや野菜等の作物の栽培ができるようになりました。住環境や農地の除染が進み、住民の帰還に備えた整備は着々と良い方向に進んできましたが、まだ問題があります。それは、以前住んでいた住民があまり戻ってこないことです。特に若い人の帰還は進んでいません。そのことにより田んぼや畑は放置され、戻ってきたけれども、震災から十年も経過し高齢となってしまって、農地の管理が難しい人たちがいます。このままではせっかく除染しても荒れ地となっていくだけです。そこで、地区の住民が立ち上げた会社が、除染後農地の保全管理や牛の飼料となるデントコーンや牧草の栽培を行って、除染した農地の維持・管理をしています。私の地区では、水稻や花きなどさまざまな農家が営農を再開していますが、酪農で再開した人はまだいません。そこで、自分が酪農を再開することで地区の復興をさらに進めたいと考えています。その夢を叶えるために、農短に入学することを決めたので、しっかり勉強をしていろいろな知識を身につけたいと思っています。卒業後は、いったん北海道に行ってみたいと考えています。北海道では、大規模酪農経営や飼料生産組織等で研修を行い、経営の実際を体験し、さらに経験を積み、技術と経営感覚を身につけたいと思います。地区に帰って酪農を始めるには莫大な資金がかかり、経営を開始してからも軌道に乗るまでは時間もかかるかもしれません。でも夢に

~~~~~◆~~~~~  
向かって精一杯頑張りたいと思います。

---

~~~~~◆~~~~~